

宿命と行為

——ソフォクレス『アンチゴネ』904-920 問題をめぐって

浜 下 昌 宏

〔序〕

運命 (moira) というのは、ある地においてある時、ある父母の下で自分が生まれたこと、そのことですでに十分な意味を持つ。仮に、そこで自分が生まれたことが恵み (tychē=偶然) であるどころか、そのためにそれ以上の偶然の重荷を背負わざるをえないとしたら、おそらく、人は運命を呪い、恨み、自分の生が祝福されなかったことに対し、生がすでに生に値しないとさえ思うであろう。人為による不幸というものを考えてみるならば、社会の矛盾・政治の不利による不幸はなんとか合理的な解決策を講じることが可能であろうし、また、自分自身の過誤ゆえにもたらされた不幸は、納得したうえで解決を図ることができるだろう。ところが、いわば自然による不幸、つまり生まれながらに背負う刻印は、独力では如何ともしがたく、まさに運命の呪いと言わざるをえない。

ソフォクレス (Sophoklēs, Σοφοκλῆς, 496 / 5 - 406 BC) 『アンチゴネ』 (Antigonē, Ἀντιγόνη) は、その前作と目される『アイアース』のように、死者の埋葬がひとつのテーマである。しかし、『アンチゴネ』で問題となる埋葬には、肉親への愛と法的禁制との桎梏が余儀なくされており、さらにはテーバイ王家の宿命も引きずった王女アンチゴネの個性も発揮されている。

アンチゴネはオイディプス王の娘である。すなわち、呪われたテーバイ王家伝説における、知らず父を殺し、知らず母と交わったオイディプス王が、その

母イオカステとの間に生んだ4人の子供のひとりである。『オイディプス王』の終幕間際、オイディプスはアンチゴネとイスメネの二人の幼い娘に向かい、「やがてお前たちが嫁ぎ行くべき年ごろになったならば、ああ誰がいったい、娘たちよ、こんな汚名をあえて背負いこんでくれるだろうか——わしの子供たちのみならず、お前たちから生まれる子にまでも、累をおよぼすであろうような、こんな汚名を? <・・・>いや、お前たちの行末は目にみえている——子を生まぬまま、嫁がぬままに、お前たちは凋み果てなければならぬのだ」(藤沢令夫訳)、と語り、その予言通り遺された子供たちは運命に翻弄される。『アンチゴネ』において、テーバイの王位をめぐる兄のエテオクレスと弟のポリュネイケスが争い、ついには互いに刺し違えて二人共に死ぬ。その後、王位を継いだ叔父のクレオンは、テーバイの側にいたエテオクレスは手厚く葬ったが、アルゴス勢と共に攻め込んだポリュネイケスについては埋葬を禁じて死体を野ざらしにするよう命じる。それに対して、アンチゴネは、その禁令を破ってまでして兄を埋葬しようと企てるのである。

アンチゴネの意志に対して、妹のイスメネは諫めて思い止まらせようとする。その理由は、自分たちが女であって生まれつき男とは争えないこと、そして、自分たちは強者に支配されている、ということである(11. 61-64)。ここには、男性中心社会における女性の諦念、あるいは、生きるうえでの知恵を窺うことができる。だが、それ故にこそ、アンチゴネの反社会的行為の重みを我々は知るのである。

『アンチゴネ』の中で、904-920行は、ゲエテによれば「汚点のように見える一箇所」であり、彼は有能なフィロログが、その部分は書き加えられたものであって偽物たることを証明してほしいと望む¹⁾。こうして我々は、そこに文献学上、論議の火種があることを知る。我々にフィロログの力量はないが、しかし改めて『アンチゴネ』を読み返してみると、904-920問題は我々にどのような考察を促してくれるのか。たしかに、結論として求められているのはその

部分が果たしてソフォクレス自らの手になるものか否かである。この問題への我々による貢献が可能かどうかは別として、ともかくその問題に関するいくつかの研究誌をふまえて、そのうえで我々の追究の視角を確認し、テキストに導かれつつ考察を加えてみたい。

さて、我々が見るところでは、904-920 をめぐる論議は、ほぼ以下のような5点に整理できるようである。まず、それらを列挙してみよう。

- 1、文章・文体上の問題
- 2、ヘロドトスからの引用について
- 3、アリストテレスが『レトリカ』のなかで引用していることについて
- 4、アンチゴネの性格について
- 5、450-460行で主張された、神の法の普遍性と矛盾する点について

むろん、上記以外にも、例えば、「夫や子供よりも兄」という論理の不条理さなども考えられるが、本稿では以上の5点に限定して、順次検討していくことにしたい。

〔1〕

文章上の問題については、Jebb²⁹⁾は909-912行の文章をソフォクレスらしからぬとして、彼の手になることを否定する。それに対して、Campbellは、そうした不器用な表現もアンチゴネの心理的圧迫感の表現として説明可能であると言ひ、また Agard は、類似するぎこちない表現がソフォクレスに見られることを指摘する。さらに Agard は、もし909-912がソフォクレスのものでないとするならば、913-920という似たような部分に関して、それまで文体論に即しての批評がなかったことを疑問とする。また、Wycherley は、909-910に特徴的な言語上の問題点は、決して否定説を助けるものではなく、むしろアンチゴネの精神状態の現われを描写するものであるとして、肯定説の立場をとる。以上のような諸説が見られるが、さしあたって我々には、残念ながら文体に関して意見を述べる力はない。

〔2〕

ヘロドトス（『歴史』3、119）からの引用については、それがあただけで挿入説をとる Schneidewin の立場がある。彼の考えでは、こうした技巧を喜ぶアテネ市民のために、俳優かソフォクレスの息子の手によって挿入されたと推測するが、さらに Dindorf は、内容の点から、ヘロドトスでは生きている兄弟について語っていることを、そのまま死んだ兄弟に当てはめているのはおかしいと、やはり挿入説の証拠とする。一方、Dain は、ソフォクレスがここでヘロドトスを引用したのは、ギリシャ悲劇でそうした模倣は稀ではないのだが、その理由と場所に関して模倣の理由が不明である点が残念であるとしながらも、ソフォクレスはこれらの言葉が感動的であり、逆説的であることを十分意識して使ったのであろうと推測する。また、Wycherley は、Kitto の、それが文学史における最もすぐれた引用のひとつであるという言葉を引きつつ、ソフォクレス自らが劇的効果を狙って引用したものだ、と考える。さて、我々はどう解すべきか。ヘロドトスの友人でもあったというソフォクレスであるのだから、彼を通じて知っていたこのインタフェルネスの妻の話を、自分の創作のどこかで使いたいと思っていた、と推測してもよいのではなかろうか。‘事実は小説よりも奇なり’の例で、この話自体が、実際起きたことという現実の重みも感じさせる。ソフォクレスという創作者の心理を考えると、彼がこの話に興味を持ち、劇的なその内容から、一度は使ってみたい言い回しであったのだろう。

〔3〕

アリストテレスが『レトリカ』（3、16、9）の中で911-912行を引いていることから、Jebb などはソフォクレスの死後直後の挿入を考えているのだが、他方 Agard は、アリストテレスが〈*διάνοια*〉の正統的な使い方、つまり悲哀感を高めるために悲劇的人物によって発せられた知性の声の例として考えてい

る点から考えて、ソフォクレスの劇作の一部と見なしている。我々としては、Agard が、アリストテレスは「劇の書かれた 1 世紀後に、何ら疑問を示さずに」引用した、と想定していることに注目したい。そこで言う 1 世紀、100 年という長さはどう解するべきであろうか。もし、初演と改訂後の上演との間に、作品としての違いがあったなら、観客や批評家の間で論議、あるいはその噂などは起こらぬままにすむものなのだろうか。違いに気付くものが皆無であったとは、当時の演劇や観客の水準から見て考えられぬことである。あるいはまた、仮に論議があったとしても、100 年という長さは、その噂・記録すら消去するに十分なのであろうか、これほどの堂々とした名作であっても。

〔4〕

アンチゴネの性格を考えて、そこに見られる矛盾を整合的に捉えようとするのは、肯定説に多いようである。Wunder は 905-912 をアンチゴネの高貴な性格にふさわしくない、と否定説をとるのだが、Campbell は、ここでの感情の変化が、作品も主人公の性格も損なうものではないと考える。Agard や Wycherley は、アンチゴネの性格を肯定説の根拠の前面に出す。まず Agard は、ソフォクレス『コロノスのオイディプス』、アイスキュロス『テーバイ攻めの七将』、エウリピデス『フェニキアの女たち』のどれをとってもアンチゴネが感情性の強い女として、また、彼女が不幸な父や兄弟たちと一体感を持った献身的な女性として描かれている、と指摘し、その彼女に論理的な整合性を求めてはおかしいとする。つまり、当該の箇所では、永遠の法を守ろうとする性格上の典型が示されているのではなく、偉大な女性のきわめて人間的な性格が表わされていると見るべきとされる。次に Wycherley は、Agard の解釈を発展させる、と前置きして、ソフォクレスはアンチゴネに、生きた・個性ある人間の複雑さ・不整合・不条理という性格を付与しているのだ、と言う。彼女は行為や言動で不条理なことをするのみならず、行為に関する議論においても筋道が立てられていない。そうしたことは、この問題の箇所のみならず、74-75 行

の議論にも示されている。そして、Wycherley は、74 行が 450 行以下の原則（人よりも神に仕える）と一致しないのだから、905 行以下に関する否定説は 74 行に関しても問題にすべきである、と主張する。また Palmer は、これらの行が劇のうえで彼女の性格と一致するしないはともかくとして、その創作者であるソフォクレス自身の性格や趣味とは一致することを、つまり、レトリックや知的な技巧に対する好みを指摘する。——たしかに、人間の性格を持ち出せば、「人間より不思議なものはない」（332）のだから、さながらこの世の不条理な事象をすべて神の存在ゆえと帰するように、すべては人の性格のうちに包容されて一応の説明はつくのだろう。そのような性格論は、その議論の後で周到に劇の主題を問題にするのだが、性格を論拠にしてはどちらにも都合のいい側面が出てくるのであり、我々には説得力不足である。つまり、首尾一貫した意志も性格であり、支離滅裂の言動も性格とされてしまうのである。当然、ギリシャ悲劇における人物創造の問題に関わってくるであろう。概して「典型」（ideal type）を描き出そうとするのか、それとも「自己矛盾を露呈する人間性豊かな人間」を表現するつもりなのか。それによって、クレオンに代表される国家の法とアンチゴネによって代表される個人という、ヘーゲル的な図式による主題の受け取り方も変わってくるはずである。

〔5〕

450-460 行で主張された神の法の普遍性と矛盾するのではないかという議論は、Jebb や Schneidewin に見られる。まず、Jebb の論旨は次のようなものである。458 行で、自分はクレオンの命に逆らって、いかなる人間も神の書かれざる規範を無視してはならぬ故に、また 451 行で、神々と共にある正義は死者に対しては生きている者、就中血縁にあたる者の義務として遂行されねばならぬ故に、アンチゴネは兄を葬るのだというのに対し、ここでは、もし埋葬されていないのが夫や子供であるならばクレオンに逆らったり神の法に従うことはない、と言い出す。そうした場合でも彼女の宗教的義務感から言えば、この場

合と同じはずであり、もしここでの彼女の論理を認めれば、彼女の行為を支えてきた足場である、神の法の普遍性や堅固さという不動の土台を崩すことになるのではないか、というのが Jebb の考えである。一方、Schneidewin は、もしアンチゴネがここで言っているような、単純な目的を表わす詭弁的な論理を自分に許すとすれば、神の法という行為の動機と矛盾するのみならず、彼女にとっても不実なことであり、動機の純粹さを汚すことにもなる、と主張する。

そうした否定論の側の論議に対して、肯定論者の側からは、Bellermann が、アンチゴネは主要な動機である宗教的義務意識は保ちながらも、その義務感は人間関係の段階に相応した段階を持つと感じているのだ、と言う。つまり、だれも他人のために命を投げ出したいくはないが、兄の場合はそれが最高の段階にあるのだ、ということである。この考え方に対して、Jebb は、ギリシャ人の考え方から言って、他人と身内とでは義務を区別しているが、夫や子供は兄同様身内であるのだから、夫や子供に対する義務は兄に対するのと同じはずだ、と反論する。また Jebb は、Thudichum が肯定説の立場から、アンチゴネは死を前にして皆から断罪されつつ、最も印象的なやり方で自分の宗教的義務感の強さを語ろうとしているのだ、と論ずるのに反駁して、そのようなアンチゴネは内省的というより自己弁護の性格が強く、尊厳もパトスも色褪せてしまう、と考える。

しかし、多くの肯定論者たちは、アンチゴネの心理状態を推察することでこの矛盾を説明しようとする。まず、Palmer は、普遍的な法の代わりに個人的な結びつきを強調するアンチゴネの意向は、彼女の現在の気持の優しさが絶望的気分と一体化して現われたものだとする。また、Campbell は、アンチゴネの信念が一瞬揺らぎ、自分の行為に驚き、錯乱に近い心の状態でその行為を説明しようとするのだが、彼女が口にしたものは時代特有のものであり普遍的重要性を持ったものなのだ、と言う。さらに、Boeckh は、アンチゴネはここで以前までの行為の正当化をしていた高邁な理由を放棄し、クレオンの法を破ったことが悪かったという認識に達し、そこで、高貴な幻想が遠退くと、詭弁が提供す

るような支えに掴まろうとしているのだ、と考える。同様な認識の展開説を主張するのは Seyffert である。彼は、アンチゴネはそれまで宗教的義務感の高揚によって行動してきたが、今や皆から断罪されているのに気付くと、宗教的信念の狂信状態から醒め、支えも希望も無くしてしまい、その状態でなおも確かだと感じられるもの、つまり、彼女を兄と結びつけている深い人間感情へと戻っていくのだ、と理解する。この考え方に対しては、Jebb が、粗いテキストを理想化して都合よく解釈している、と批判を加える。

さて、神の法と兄への愛という、行為の動機をめぐる対立は、当然アンチゴネの関心は兄への愛にあったのだという議論を生む。Campbell は、アンチゴネの心にある思いはこの場合妹としての献身を示すべき唯一の機会である、と言い、また Palmer は、アンチゴネは神の法への献身からというよりは個人的な執着から兄を埋葬したのだ、とする。あるいは、Musurillo のように、彼女の動機に神の法と兄への愛と、両面を挙げる考え方もあるであろう。

しかしながら、我々は、アンチゴネの動機として、神の法か兄への愛か、という二者択一の問題にして考えるのは無理があると判断する。たしかにそうした二者択一は彼女の統一的な性格づけを明確にすることができるかもしれないが、単純化した分析的整理は、結局、行間に潜むアンチゴネの存在の重み、あるいは異様さが不明になるであろう。つまり、父オイディプス王、さらに遡るテーバイ王家の一族に向けられた呪いの不可避性、その枠内にありながらも自分の意志で一連の行為をなし、行為しながらその合理的論拠を求めろのだが、しかしどんなに自分を正当化しえたとしても末路はすでに明らかであるという運命——彼女を、いわば操る、そうした運命の駆動力を見失っては、作品『アンチゴネ』の古典としての意義は軽くなってしまふ。例えば、Campbell は、「一切の人をものもしない彼女の論拠は、単にクレオンの法のみならず、それまで彼女が訴えていた書かれざる法以上に深い何かである。それは、彼女独自のポリュネイケスに対する気持の中に存在する」と言うのだが、そうした兄に対する気持それすらが、尋常の兄弟愛を超えた、いわばグロテスクな結びつき

を感じさせるのである。「神の書かれざる法」と「兄への愛」とは、もともと同一次元では扱えない事柄である。「神の法」を持ち出した場合、それはクレオンの法と対立するかしないかはともかく、クレオンおよび市民たちと同じ立場に立った、共通の論理（ロゴス）として機能しうる。だが、「兄への愛」は彼らと立場を同じくする説明の言葉（ロゴス）とはならない。しかしながら、それ故にこそ、客観的な正当化を通しての行為の普遍性を宣揚するのではなく、アンチゴネのみに秘められた、いわば「自分の理由（ロゴス）」を語ることによって、行為の特殊性を際立たせ、行為そのものの意味、その鋭さ・強さを浮き彫りにしようとする。すなわち、行為が劇の高まりを促す。その意味では、アンチゴネがここで兄への愛を強調することに無理はない。

さて、では改めて考えてみると、そもそも彼女の「行為」とは何であったのか。まさに、単なる埋葬がそれである。

〔6〕

以上のように904-920をめぐる主要な論点を概観した後で、我々なりにこの問題に寄与できる点を考えてみたい。それは「埋葬」という問題である。死者に対する悼みがなに故埋葬への意志となるのか。その原初的な心根についてなされる説明は、せいぜい、死者に対する愛惜と畏れ、あるいは死霊の安息のため、といったことである³⁾。アンチゴネがかくも兄の埋葬にこだわった背景には、死者の晒し者は罪人の徴とされた古代ギリシャの慣習が、彼女の意識の裏にあったと想定できる。とまれ、改めて「埋葬」の意味について考えてみたい。

もとより、死とは社会的存在としての個人が死ぬのであるから、したがって葬儀も社会的な制度とされている⁴⁾。だから、埋葬を禁じたりできるのも社会的な権力の権限の内となる。そこから、アンチゴネの場合に関して、久野昭は、「葬送は政治の問題ではなく、宗教の問題であった。宗教への政治権力の介入が、この悲劇を生んだとも解釈できるであろう」と言い、さらに、「葬儀はつねの時空の断たれるところに成立する神聖な儀式であった。クレオンとアンチゴ

ネーの対立は、ある意味ではつねとものとの対立、けとはれとの対立をも含んでいるといってもよい。ポリュネイケスの死にあたってのアンチゴネーの選択がアンチゴネー自身の死を賭けたものであっただけに、よけいつねの時空での掟は斥けられ、彼女の行為がはれやかな崇高性を帯びるのである」、として904-920ではアンチゴネの行為のはれやかさが弱まってしまうために否定説を支持する⁹⁾。たしかに、宗教と政治、つまり神の法とクレオンの法という対立図式は、埋葬の視点をまつまでもなく成り立つものであるし、その狭間に立ったアンチゴネの悲劇と見れば、徒に兄への愛が強調されることは焦点をぼかすことにもなる。だがその図式では、アンチゴネの存在の現象的な一面しか捉えられないことは、すでに述べた通りである。さらに、埋葬という視点からも、904-920、特に905-915に表明されている論理の擁護は可能ではないだろうか。埋葬の儀礼的側面(服喪、供儀、祈願、追善、禁忌、etc.)は社会性を持つ。だが、そうした行為の形式面ではなく、主体の内面にあっては、埋葬という行為は死者との関わりを確認しているのである。だから、兄への愛という内実が埋葬という形式をとらせる、という説明も十分可能である。さらに、宗教と政治という対立で、あたかも二つの分野が互いに相容れないもののように見なすのも誤りであろう。日常と非日常(けとはれ)という図式が安直であるように、一つの行為や精神を宗教的要素と政治的要素とに器用に分けることは、何らかの理論的整理に資するのみで、moiraとtychēとを担う人間主体の存在と行為の意味を探るには役に立たない。

〔7〕

仮に904-920を偽作・挿入説をとり、その部分を省いてテキストを読んでみるとどうなるか。その場合、アンチゴネとクレオンとの対立はより鮮明になり、アンチゴネはポリスの法の圧力の下で殺されるという運命が劇の主題として明らかになるにとどまる。しかし、904-920が展開されることによって、主題はどう展開され、劇としての高まりがどうなるか。おそらく、我々が注目し

たように、埋葬の意味が改めて問われることになり、彼女の死の意味がより限定されて、彼女の行為による劇的高揚が一段と増すのではないか。つまり、社会的・共同体の行為としての埋葬が、王の権力によって禁じられているとき、あえてそれを犯して権力に挑むことは、埋葬の持つ別の意味を明らかにするであろうし、また、その行為の強さ、強い意志を浮かび上がらせる。もしアンチゴネが単に神の法を恐れて埋葬という行為に向かうのであるならば、それはいわば神からの叱正・懲罰を恐れる自己保身的本能に基づくにすぎない。肉親、つまり兄という、一族の不幸な運命を共有する者への愛に基づくが故に、彼女の強い意志が生まれたのではなかったのか。心情としての兄への愛を、クレオンの法・国家・権力に対するより高次の根拠、ないし口実として、自分の行為を合理化・正当化すべく、神の法を持ち出しているのではないか。あるいは、運命が一生を決定づけている女性として、常人以上に神の法を守ろうとする宗教的義務感を持ち、一方で、運命の共有者である兄への愛情を常人以上に持つというように、アンチゴネは両方の心情を併せ持っているのかもしれない。

では、改めてテキストを読んでみよう。当該箇所のうち、とくに問題となると思われるのは 905-916 である。904、および 916-920 は、なんらかの立論への手がかりが得られそうにない。

まず、908<τίνος νόμου δῆ・・>と、914 の<νόμου>に見られる νόμος は何を指しているのか。つまり、450-460 で主張されたような神の法のことなのか。そうではないだろう。ここでは、905-907 において言った、子供や夫であるならばこうはしないであろうということの理由を問題にしているにすぎない。そこで、909-912 で νόμος の説明がなされる。つまり、両親が死んでしまっただけでは兄弟はもう得られない、という「定め」を意味している。そして、914 「それをクレオンが断罪する」という「それ」(ταῦτα) は、そうした νόμος に基づいた行為を指すであろう。ここでアンチゴネは、神の法という後ろ盾を出してはいないが、自分の感情の自然さ・正当さを主張している。クレオンを詰るのとは自分の一途の信念を認めようとしなない態度に対してであるように思える。

そして、問題の行が終り、921「神々の正義」(δαμόνων δίκην) が出てくる。直接にはクレオンによって断罪されたものを、アンチゴネは神罰であるかのように考えているようでもある。この心理は、直接クレオンに対して憎しみをむきだしにせず、一族を覆ってきた暗い運命を引き受けようとする覚悟の表われと見ることができる。そのような見方は、アンチゴネの性格を考えるうえでも何ら矛盾はないと思われる。

904-920 以前では、アンチゴネは自分の行為の普遍的根拠を、国家・法という社会的・歴史的・相対的根拠に対して、神の法に求めていたのだが、この904-920 においては、自分の行為の口実を求めることを止め、ただただ自分の意図の特殊性を語ることで行為の主観性を際立たせている。それによって、行為の劇的性格を高めている。もし彼女が徹底して神の法・神の意志の下で生きることに徹しているのであれば、自殺という結末は理解しがたく、まさに実存的行為の延長に自殺があったと見るべきではないか。運命の軛の下で生きることを余儀なくされた女性アンチゴネが、その運命の共有者・宿縁の者としての兄弟に対する愛をつのらせ、結果として国法に反逆し、さらには自死を選択したのは、実存による運命からの脱却の企てとも言えるであろう。まさに904-920 は、その彼女の心情・決意が吐露されている部分ではないのか。ゲーテは、その箇所彼女が持ち出している理屈、つまり、彼女が兄のために為した行為はまさしく兄ゆえのものであり、子供や夫に対してはありえないこと、夫は死んでも他の夫を得ることができ、また子供が死んでも別の子供が新たに得られるが、ひとりの兄弟は二度と得られない、父も母も死んでいる故に新たに兄弟は得られない、という理屈の滑稽さを難じる⁹⁾。しかし我々は、その詭弁を愚かな心情の表われと解するのではなく、むしろ滑稽と思えるほどに不条理なその論理の底に、アンチゴネの苦しい理屈、つまりどのような論理でも説明しきれない彼女の実存への意志を読み取ってみたいのである。

904-920 問題の判定に関する説得力は、すでに読解者の解釈の試みから離れて、アンチゴネ自身の行為とその意志が示している説得力 (pistis=信念) を

我々がどう受けとめるかにかかっている。そもそも行為とは、言うまでもなく「何か」の表現である。つまりひとつの行為は、神の法を代行していたり、国法の代執行であったり、また、憎しみや愛の表現であったりする。行為のロゴスとは、そのような根拠の説明ないし説得力として立てられるものである。しかるに、何かの代表・表現たることを行為が超えるとき、その行為はきわめて私秘的な「私の行為」として、その特殊な重みを際立たせる。人は、国家・社会、さらには神や運命にすら反抗するとき、そのような「私の行為」を決断するのではあるまいか。

[註]

- 1) エッカーマン『ゲーテとの対話』（神保光太郎訳、角川文庫、昭和41年）、下巻 p. 248〔1827年3月28日〕。
- 2) 以下、原語綴りの論者の言及に関しては、下記 Bibliography、および論者一覧を参照のこと。
- 3) 例えば、『宗教学辞典』（小口偉一、堀一郎監修、東京大学出版会、1973）「葬送儀礼」参照のこと。
- 4) 大林太良『葬制の起源』（角川新書、1965）、p. 8f. 参照のこと。
- 5) 久野昭『葬送の倫理』（紀伊國屋新書、1969）、pp. 157-160。
- 6) エッカーマン、前出書、p. 248f.

[Bibliography]（『アンチゴネ』関係に限る）

- Anouilh, J., *Antigone* (1942), 芥川比呂志訳「アンチゴヌ」『アヌイ作品集』第三巻、白水社、1957.
- Agard, Walter R., “*Antigone* 904-20”, *Classical Philology*, 32, 1937.
- Blaydes, H. M. & Paley, F. A., *Sophocles*, with English notes, London, 1859-79, vol. 1 (in 2 vols).
- Braun, R. E. (trad.), Sophocles, *Antigone*, Oxford U. P., 1973.
- Campbell, Lewis, *Paralipomena Sophoclea*, London, 1907.
- Campbell, L. & Abbott, Evelyn, *Sophocles*, ed., with introd. & English notes rev. ed., Oxford : Clarendon Press, 1899-1900, 2 vols (vol. 1 : Text, vol. 2 : Explanatory notes).

- Dain & Mazon, *Sophocle*, t. I (Les Trachiniennes; Antigone), text établi par Alphonse Dain et traduit par Paul Mazon, Paris (Les Belles Lettres), 1962.
- Jebb, Richard, *Sophocles : the plays and fragments, with critical notes, commentary, and translation in English prose ; Part III. The Antigone*, 3rd ed., Cambridge, 1900.
- Musurillo, Herbert, *The Light and the Darkness : Studies in the Dramatic Poetry of Sophocles*, Leiden, 1967.
- Nussbaum, Martha C., *The Fragility of Goodness*, Cambridge, 1986.
- Palmer, George Herbert, *The Antigone of Sophocles*, tra. with introd. and notes, Boston & N. Y., (c. 1899).
- Pignarre, R. éd., *Théâtre de Sophocle*, tome I, Classiques Garnier, 1958.
- Segal, Charles, *Tragedy and Civilization : An Interpretation of Sophocles*, Harvard U. P., 1981. [including “Antigone : Death and Love, Hades and Dionysus”, rep. in, H. Bloom ed., *Sophocles*, N. Y. : Chelsea House Publishers, 1990 (Modern Critical Views)]
- Wycheley, R. E., “Sophocles *Antigone* 904–20”, *CP*, 42, 1947.
- 松永雄二 「劇 “Antigone” の統一性についての一つの覚書」、『西洋古典学研究』、4、1956.

[本論で言及した 904–920 問題への論者一覧：○は肯定説、△は否定説]

- Agard—v. Biblio.
- Bellermaun—v. Biblio. Jebb, p. 261f.
- △ Blaydes & Paley—v. Biblio., p. 61.
- Boeckh—v. Biblio. Jebb, p. 262.
- Campbell—v. Biblio., p. 1 ; p. 34.
- Campbell & Abbott—v. Biblio., p. 212.
- Dain & Mazon—v. Biblio., p. 66f.
- Dindorf—v. Biblio. Campbell & Abbott, p. 212.
- △ Jebb—v. Biblio.
- Musurillo—v. Biblio.
- Palmer—v. Biblio., p. 97f.
- △ Schneidewin—v. Biblio. Blaydes & Paley, p. 571f.
- Seyffert—v. Biblio. Jebb, p. 262.

宿命と行為

- Thudichum—v. Biblio. Jebb, p. 262.
- △ Wunder—v. Biblio. Blaydes & Paley, p. 572.
- Wycherley—v. Biblio.

Summary

Destiny and Action: An Interpretation of 11.904–920 of Sophocles' *Antigone*

Masahiro Hamashita

Concerning 11.904–920 of Sophocles' *Antigone*, there have been arguments on its authenticity. Some moot points which the arguments have made are the following: 1) on the style, 2) on the citation from Herodotus, 3) on the reference made by Aristotle in his *Rhetorica*, 4) on the unity of Antigone's character, 5) on the principles of justification which Antigone chooses.

According to our interpretation, the crucial point is that we must not see her action of burying the dead without considering circumstantial conditions of her existence. From birth, Antigone was so burdened with dark destiny originated by her father Oedipus that her sympathy with her brother Polynices, with whom she deeply shared the destiny of their family, exceeded that of ordinary brother–sisterly love. Her illegal action against Creon's regulation is an existential project challenging and escaping from her destiny. Therefore, even though we may still find some inconsistency in 11.904–920, we understand her decision to act was to assert her existence, whichever justification she might prefer as her own choice.